

●選んだテーマ

テーマB：「私の“想いよ届け！”物語」

●エピソードタイトル

地域の子どもは社会のたから すべての子どもは明日へのひかり

●エピソード本文

2015年、私は母の小さな店を継ぐ決心をしました。40年前、母が女手一つで4人の子どもを育てるために始めた店。地域の皆さんや子ども達に愛され続けてきた駄菓子屋「つじや」。

その店を母が閉めたのは、足を骨折し長い入院をしたからでした。退院しても店を続けることは難しく、母は店をたたむことを決心しました。私は、少しずつつづけるために何度か店に足を運びました。するとそのたび、子ども達や地域の方が「おばちゃんは？」「大丈夫？」「お店開けてほしいな」と声をかけてくれたのです。

こんな古い駄菓子屋はもう時代に合わないし、ニーズもないだろう。私はそう考えていたので、皆様の温かい声に驚き、母や店を愛して下さったお客様に感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。いつの間にか、私がこの店に魅了され、続けたい！残したい！と思うようになりました。もちろん母も一緒に。

私は、小学校教員を15年間勤めました。娘を持つ母親でもあります。勤めた学校区や住んでいる校区では地域の方の子ども達への温かい関わりに支えられました。子どものより良い成長を育むためには、学校や家庭だけでなく、地域の皆さんの力がとても大切です。

今の子ども達は様々な悩みや課題を抱えています。親や教師ではない大人だからこそできる何かがある、子ども達が悩んだり困った時にふと立ち寄ることが出来る場所は一つでも多いほうがよい。そんな思いから、今度は私も駄菓子屋のおばちゃんとして、地域の教育力のお役に立ちたいと思うようになったのです。

実際、つじやには子ども達の笑顔があふれています。駄菓子を前にすると、こうも心が開放されるのかと驚くことがあります。駄菓子をきらきらした目で選ぶ子ども達に「野球の練習終わった？」「君のお父さん、よく知ってるよ」「暗くなる前に早くお帰り」と話しかけると嬉しそうに答えてくれる子ども達。学校の教師が大事にしている教育相談、生徒指導の実際がまさにここにあるのです。駄菓子屋は、子ども達と地域の大人をつなぐ一つの手段やきっかけになり得る、そう信じて毎日子ども達と楽しく過ごしています。

2018年、私は7歳だった娘を白血病で亡くしました。しばらくは、誰とも会いたくない、何もしたくない私でしたが、闘病中いつも娘が言っていた言葉「人の役に立ちたい」が、私を突き動かしてくれました。娘は亡くなる1週間前まで、小児がんの子ども達の支援活動「レモネードスタンド」をしていました。闘病の長かった娘は、誰かの役に立つことを自分の一番の喜びだと思っていました。闘病中の子ども達は長い入院を余儀なくされます。外にも出られず、家族にも会えません。そんな子ども達の役に立てたら…。

毎日のように目を輝かせて「つじや」に通って来る元気な子ども達を見て、駄菓子や子ども達が集まる場所には病気の子も元気なパワーがあるのではないかと考えるようになりました。娘の想いをつなぎたいと小児がん支援を行ってきましたが、その支援活動はこのつじやでもできるのではないかと考えたのです。

現在、つじやでは、子ども達のおこづかいからの募金活動、レモネードスタンド、入院中に喜ばれるおもちゃ、入院用ハンドメイド品の販売など、闘病中の子ども達でもワクワクできることをと様々な取り組みをしています。病棟や自宅から出られない子ども達とお店をオンラインでつないで大人気のくじ引きをしたり、駄菓子を自分で選ぶといった「リモート駄菓子屋」も企画中です。地域の子も達も小児がんの子ども達へ想いを寄せてくれます。

子ども達の笑顔は明日への光。その笑顔に絶やさぬよう、これからも「つじや」は、すべての子ども達がワクワクする仕掛けと居場所づくりをチャレンジし続けていきたいです。